足を得ずして、尚ほ口を以て之を成さんとするのです。だから婦女子の坐談となれば虚榮心發輝競爭會と云つた樣な按排となるのです。虚榮を語らざる者は女にして女ならず、との必で居りながら、男性に向つては、何の虚榮心の候ふべき、と云つた樣な口を利きます、然しその口既に虚榮に出るのですから先つ虚榮と女子とは離れざるものと見て宜しいのである。

終りに望み僕は女傑諸君の虚榮を戒しむる爲めに左の句を座右に呈します。然し左の句は漱石先生の小説門の一節でありますからそのお積りで。

宗助の同僚の高木とか云ふ男が、細君に小袖とかを强請られた時おれは細君の虚榮心を滿足させる爲に稼いてるんぢやないと云つて跳ね付けたが、細君がそりや非道い、實際寒くなつても着て出るものがないんだと辯解するので、寒ければ已を得ない、夜具を着るとか、毛布を被るとかして、當分我慢しろと云つた話を、宗助は可笑しく繰返してお米を笑はした。お米は夫の此樣子を見て昔が又眼の前に戻つた樣な氣がした。

「高木の細君は夜具でも構はないが、おれは一つ新しい外套を拵へたいな。此間齒醫者へ行つたら、植木屋がこもで盆栽の松の根を包んでゐたので、つく〴〵左う思つた」

「外套が欲しいつて」

「あゝ」

れ米は夫の顔を見て、さも氣の毒だと云ふ風に、

「御拵へなさいな。月賦で」と云つた。

宗助は、

「まあ止さうよ」と急に佗しく答へた。

慇懃と恐縮

慇懃を通じて閨中の語らひをした、と云へば不德なる事ですが慇懃の二字を引離して見ると如何にも叮嚀なる辭義があると思ふ。

坐談に於て缺くことの出來ぬのは慇懃なのです。所が慇懃が過ざて恐縮するのは餘り面白くないやうです。手紙などにはよく、御邪魔仕り恐縮に存じ候と書きますが人の前に出て終始一貫恐縮の態度を持續致しましてはよくないではありませんか。

さあ君愈き給へ、

と云はれて、座布團そッち外けで疊の上にモヂ〳〵して居るのは如何にもミットモないのでしよう。

椅子に御掛け成すつて下さい、

と白い手まで出して優待して貰ふのに、

はい、

と兩足を立て、兩手を揃へて恐縮して不動の姿勢を持して居るのは

果して東洋大帝國の禮式に叶ふて居るのであらうか。親切として受けるのが禮に叶ふて居る所だらうと思ひます。それだのになんでも引込むでさへ居ると、熊蜂だつて刺さないと云ふ料見で恐縮するのは呆氣ない事ではありませんか。先輩などを訪ふて、年頃の娘さんでも出て歡待して貰へば、妻君に欲しがらぬ以上は、何だつてドン〳〵饒舌つた方がよからうではありますまいか、沈默は雄辯に優ると云ふ樣な心で右眼左眼の方向を違はせる樣では却つて宜しくないのです。慇懃も度に過ぎ、恐縮も度に過ぎては、

彼人は人中に出て交際も出來ない變人だ、

と云はれる樣な不遇を來たさないとも限りませぬ。演說でもあれば諸君よ、人は慇懃ならざるべからず、而して時に恐縮するのが……

恁麼風に前置きしまして、

扨て愈々本問題に入りますが、

でよいのだが、坐談はさう獨白の樣に一人勝手の都合には行きませぬ。

聞く所に依ると、軍人などはその上長官を訪問する時は、日本間なら座布團の側に、西洋間なら椅子の側に慇懃なる姿勢を以て恐縮して上長官の御入來まで待ち、而して愈々主人が表はれ、一應挨拶を成し、

お掛け、

と手を出して引込めて後座布團に座るとか、椅子に腰を掛けるとか云ふ風な禮法があるさうです。之は至極結構な事でしよう。軍人のみならず普通の吾々も、先輩長者に對しては此の禮法を用ゐたらよからうと思ひまして、僕は實行して居るのです。然し疊の上なら兎も角椅子の側に一時間も二時間も待たせられる樣だつたら椅子にかけたつて怎うありましよう。若し其家の主人公が室へ參りましたら同時に身を起し一歩退つて、御辭義をするなり怎うなりと其時は其時の臨機應變にやるのです。

人には皆それ〳〵癖があつて客を招ずるにも言葉使ひから違ふのです。龍峽先生は、西洋間の書齋だから、

掛け給へ

です。漱石先生は書齋の隣りの室で、雜作ない口調で、

敷き給へ、

なんです。掬汀先生は

お敷きなさい

人に依つてよく違ひます。白川醫學士は笑ひ半で何時も

敷くといゝ、

同鄕の人だから矢張り佐賀の言葉が混ります。後藤男は鼻眼鏡が餘程氣になるやうな顏付で、默つて居らるゝから、僕も默つて座るのです。其他知名の先輩や學者などを訪問して見ましたが人に依つて

始めの挨拶が違ふものです。一々云つてた日には

何だ下らぬ事を、穴探し、

と叱られるかも知れぬ、叱られたら自分が眞先に恐縮して了つて迚

ても、坐談法なぞ書くことが出來ませぬ。

貴夫人の訪問も又一種特別の味があるものでして、念入りの御挨

拶がある。御世辭も混合して居るかも知れぬが、貴夫人の前だか

ら、嬉しいなりでそんな所に氣は附かない。

さあ怎うぞ御掛け成すつて下さい、

如何にも叮嚀極まることなので、草深き田舍育ちの僕等には光榮無

上とも云はんか、呵々。

素より人と接し談ずるには慇懃なるより上越したことはありますまいが、先に云ふた通り度を過ぎて、一々小笠原流で身体のこなしから茶の飲み格好まで氣を使ふのはよくないと思ひます。角を矯めんとして牛を殺す、と云ふ事がありましよう。少しの欠點を補はんと欲し、余りに心を碎き過し、却つてその欠點を見せ、禮を欠くことがあります。

人間には野性と云ふものがあるさうでして、異性を見れば接吻し度いとか、金を見れば他人の物でも自分の懐中に入れて見度いとか男なら汁粉の十杯も喰つて見たいとか、女ならお芋の百目も頬張つて見たいとか、此類の性慾物慾食性を稱して野性と云ふさうです。

而して此野性から打算すると此性の赴くに任せるのが人生に最も忠實なる所ださうですが、人中で年頃の男と女が抱き合つて接吻するとか、金が欲しい〳〵と町中を呼び歩くとか云ふわけにもまいりませず、御姫様がお芋を頬張つて威張るのも國の名譽ではないのですから此處に道德とか倫理とか宗教とか云ふものがをこつたのでしよう。それと等しく内に在りては禮法を心得べし、と云ふやうな觀念が吾等の頭に浸入して居るのです。實際を云ふと誰の前にでも、放縱に勝手を云ひ、胡座でも搔いて居るのが坐つて居るよりは樂であらうが、誰しもそれでは心が咎むる、てふ感じが起るのでありませんか。胡座で雜談にときを費した後と、正坐で談話に花を咲かした後との心持ちを比べて御覽なさい。感想は怎うですか。後者の方がより以上の愉快を感ずるのではありませんか。だからそこの所は人は野性を曲げても坐談は成るべく正しい座り方をしてやるのがよいと思ふのです。先輩友人妻君子弟の前と否とに拘はらず、此態度を以て坐談するのを慇懃なる坐談法と申し度いのです。

慇懃に似て非なるものは恐縮です。恐縮の態度を以ては迚ても愉快な坐談は出來るものではありますまい。辭義に抗した解釋を附けても坐談が完全に出來ぬ譯が判り升。物にも人にも恐れて居ては仕事は出來ないのです。僕は幼少の時より親爺と雷鳴は怖かつたのですけれども、年長じ物の理を辨へてからは怖い物はなくなつたが、

父の前にては怎うも頭が上らないのです。何樣恐ろしいと思ふ物や怖い人の前では迚ても話所か、立つても居られない樣に震ひを感ずるのです、怯懦な弱い男になると其頭躰(ヅータイ)は大きくても女の前に立つと怖くなつて震へるさうです。僕ですか、未だ經驗はないのですが怎く言ふのは故二葉亭四迷氏著平凡の請賣りです。男が女に對して一般に怎(こ)うだとすれば、女にしてやられる理由の解決が附きます。それは女には恐れるので女の使命に從ふと註をすればよいではありませんか。兎に角恐いとの感念がある時は人は如何なる微細な事にても自已の獨立したる意志を以て處理する事が出來ないと斷言してよからうと思ふのです。英雄は決して恐縮を致しませぬ。人の死後は大概の英雄でもその睾丸が收縮するとか云ひますが。此處に面白い話があります。吉田松蔭先生が殺された時の事ですが、首なき死屍がコロ〳〵して居るので松蔭先生は何れだか判らなかつた。そこで先生は今古に比なき英雄だから睾丸が縮んで居ないだらう、との評議で、調べて見ると案の條一個の死屍の睾丸が伸びて居たから段々と調べて見るとそれが松蔭先生の死屍だと解つたさうです、英雄は死後まで何處か違つた所があるでは有ませんか。死後にも睾丸が縮まぬ位であるから生前に於ても凡百の事業に對し、如何なる人に向つても氣が縮まないのです。縮緬は縮んだのがよいでしようが人を縮緬など丶比較しては勿体ないことではありませんか。如何なる

時と場合とに論なく決して恐縮すべきものではありませぬ。

人は他を恐縮せしむるだけの威力を有つ了見で居なければいけぬのです、唯禮法として一時的敬意を表する爲めの恐縮は敢て論ずる程のことでもありませぬ。

慇懃は嚴格で、恐縮は柔弱です。前者の性質の人は人を見て態度を變へるやうなケチな事はしませぬけれども、後者になると自分より目下の者と見れば低い鼻まで高くして高慢チキな顔をして。家にあると、妻君とか子供とか女中とかに妙に威張り散らすものです。彼は益々修養し、之は是非避くべきことであると思ひます。

無遠慮と非難

打ち開け話が即ち無遠慮の表象とも云ひましようか。然しそれは相手構はず打ち開けることを云ふのです。友達とか親兄弟とか夫妻とかに打開け話をするのは無遠慮ではない。先生を摑まへて

僕は意中の人がありまして、怎うも勉強が手に附かんのですが、媒介して呉れませんか、

などは隨分思ひ切つた無遠慮なる話ではありませんか。尙ほ進んで

和女は怎うも寢癖が悪くて不可、大きい足を人の足の上に乘つけて吃驚した、

これが夫婦間なら差支がないが人の前では話されることでない其話されないところが即ち遠慮である。

されば無遠慮なる坐談の定義を下す時は、人の性情場合等を顧みる事なく思ふ事を饒舌るのが無遠慮なる坐談でゐらうと思はれ升、此無遠慮なる坐談は大に避けなくてはなりませぬ。

お世辭を云ふ樣な人には無遠慮な者は少ないやうである、お世辭過度の使用者には此無遠慮なるものを注射すると良い具合になりましよう。何でもよい所があれば惡い所もあるもので。無遠慮の坐談でも惡い所ばかりでよい所がないとは云へませぬ、よい所もあります。唯避けよ、と最初に申しましたのは之を善用する事がなく、唯濫りに人に皮肉の言を浴せかけたり、破廉恥な事を云々したり、或は人を非難攻擊したりして、人に迷惑をかけることが多いから先づ誡めて置いたのです。

閣下等の內閣が倒れたのは山縣サンの彈劾に依ると云ひますが本當ですか、而して閣下は殆んと伴食だつたさうぢやありませんか一体に僕は面倒臭い事は好かぬから短刀直入で聞く。最も政治界の人は特に磊落な人達が多いのですから、無遠慮に過ぐるかと思ふ事でも氣にも掛けないで笑つて聞くのです。之れ位のことは、何とも感じないのでしよう。何樣無遠慮な口を利きまして顏に何とも物色せずして坐談をするやうな相手を持つ位愉快な事はありますまい。然も青年の特色とも云ふべきは第一元氣です。而して此元氣に伴ふ無遠慮は決して害にはなりますまい。

所が遠慮深い男になると友達や親兄弟にまで遠慮して自分や他人の爲になることでも、若し直言して氣描くさせたり、する樣な事があつては、と如何樣自分だけは思慮深い樣に自惚れて居るが、そんな事は大に排斥すべきであると思ふ。

あゝ、さうだつたのか、僕は誤解して君を見て居た、矢張り打解けて話をして見ると能く分る、從來意志が餘り疎通しなかつたからねね、

など云ふ樣な場合がよくあるものです。餘り遠慮が過ぎた爲め圓滿に解決することも永く意志の懸隔して居る場合がある、古人の言葉に遠慮は無沙汰と云ふことがある誠に格言であると思はれます。

然し茲に云ふ無遠慮なる意義の內容は、赤心を吐露すると云ふ心でなくてはなりませぬ。人は無遠慮なる言葉を解釋するに消極にのみ解釋するからよくないと思ひます。無遠慮も右の意味から之れを善用すれば大に宜しい點があると思ふ。その善用すると否とは其人の働きで所謂坐談の上手下手にある。近頃の自然主義文學とかは、先づ人間の惡い所をのみ見て、然も之を上品に見て行く即ち藝術的に觀察する、而して之を優麗なる筆を以て描寫して人生を研究する臭い物蓋主義は不可、とて如何にも開け過ぎた事を云ふ樣ですが、之は無遠慮の弊とも云ふべきものではありますまいか。

だから僕等は絕對に排斥し度いと思ふのですが、さりとて蔭では戀

の何のと云ふ癖に、人の前では、家中を荒れ廻つて居た子供が父の歸宅を見て、御父様僕ア大人しくして居ました、と云ふ様な風を見せるのは餘り褒めた話ではありませぬ。善事も度を過せば却つて惡くなります。慈善だとて金を呉れて居ると貰ふ人間は怠惰になつて働かぬ様になつて了ふのではありますまいか。況して、惡いことと多くの人が認むる無遠慮に至つては、度を過すと害になるといふ事を心得て貰ひ度いのです。

僕が言ひ過ぎたので彼れは僕を變に思つて居るのではあるまいか貴女の事なら何だつて……あゝ生命だつて何の惜しからう、と云つたのが餘り輕々しかつたらうか、御身を思ふ故に彼の如く熱誠

ある言葉を注いだのです、と申譯の手紙を出さうか嗚呼愛する孃よ、此心を知らないのか、天地になき愛する人よ、

と云ふのを時代の人は戀に煩悶する人、と註するが、僕は斯樣男を、無遠慮の出來損ひ、と云ふのです。口で云ふのは煩悶でなく、そは愚痴と後悔の具体的表象です。

然し斯くの如きは至情迫つて無遠慮となつたかも判らぬ。思ひ餘つて愛人に抱き附いたと云ふのは古今の歴史にその例が多いのです ナポレオンが結婚した時は花嫁が表はれると堪ね兼ねて、人目も構はず抱き附いて接吻したさうではありませんか。だから極度の思慮は極度の無遠慮となり、極度の無遠慮は常に後悔と愚痴を伴ひます

然し時代の人は極度の無遠慮を夢中と解釋しまして、後悔愚痴を煩悶なぞと申しますが、此等凡て僕の目からは小人の無遠慮とより外見ないのです。

また子供の癖に、余り遠慮過ぎるのは見惡いものと思ひます。子供の無遠慮なる振舞ひは却つて天眞爛熟です。子供の無遠慮なる言語は無邪氣です。僕は子供が好だからとて子供の贔負をするのではありませぬ。高島先生は兒童心理講話に

今此はしがきを書き終はる時私の末子で一年と八ケ月になります武雄は庭の池の傍なる若葉の蔭で躑躅の花を持ちながら廻らぬ舌で「でんちやあみちあじふもんじ』と歌つて居ります。私の目には生きた詩歌が歩いて居ると見ゐ私の耳には微妙の天樂が響くやうに聞へます。果して僞りの多い世の中に子供の可愛い事ばかり眞實のことはありませぬ。

とあります。僕も三百五十余里遠い故郷の芦刈に享一と云ふ可愛い弟が居る事を思ふと、且つ五人の兄樣で成長した過去を思つて見ますると、子供の無遠慮なる言葉は眞に愛すべしではありませんかと云ふには充分の經驗と信念とを持つて居ます。その言葉は詩歌とも耳に響くのであります。我が　今上陛下の御製に

われもふことこちつけにいふ幼な子の
言葉はやがて歌にぞありける

と仰せられて居ます。子供の愛すべき所は天眞爛熳なる所にあるではありませんか。思ふなりに打ちつけに云ふのを、それを無暗に遠慮して物を言へ、と敎ふる人の氣が知れぬ。だからこそ、英國詩人ウオルズウオルスの言「子供は大人の父である」を思ひ當るのです。無遠慮に坐談する、と云ふ事を飾氣なく談話する、と解釋するのが僕の心です。女は地顏に地姿よりも、或程度までの裝飾を加へた方が綺麗にも見ゐ、又接するにも心持ちがよい。余り極彩色を加へるのは却つて見惡い。人の心も余りに粉飾を加へたよりも粉飾の加はらないのが綺麗でもあり接するにも心持ちがよいではありませんか。

俗に無遠慮と云へば人の穴探しの樣に思ふ者があるが、穴探しは穴探しです、大に劣等なる品位の人でなくては出來ないのです。而してその癖は女に多いと思ふ。

貴女御氣附きですか？、彼男の廣袖が破れて綿がチョイ〳〵見ゐるのよ、

客人が歸つた跡に女のみ殘ると直ちに恁麼話しが始まる、

はあ、妾可笑しくつてよ、無遠慮な男だつて隨分のお饒舌りだわ

女の坐談には合槌が面白い。

無遠慮だつてね、彼男は彼風采で大臣の御宅へだつて行くつて

よ、

恥を知らないのにも程があるわ、襟垢が隨分だつたわ

それからそれと段々坐談は佳境に進み行くのです。女は又よくその穴を見附け出すもので、一寸道で會つた時でも、

先日途中で會つた時貴郎は此縞の着物ではなかつたわねえ、にゝ覺ゑて居ますとも、帶の下に丸い燒穴があつて白い綿が見ゑて居ました、

そりや女の小さい所に氣の附くのは諦れるのです、恁麼事は決して無遠慮ぢやない、穴探しです、こんな所が女の天性かも知れないが僕は女傑諸君に忠告して此惡癖を矯正したいと思ふ。

それに無遠慮が長じてピシ〳〵力ある刺戟を與ふのを皮肉と云ふのです、皮肉の事は他に申しますから默つて素通りして、皮肉が過ぎると非難攻擊になりますから、此處に非難攻擊に就て申しましょう。

坐談は元來平和の性を帶びまして、一家團欒して嬉々と喜ぶ、など申しますし、喃々として語るの如く、之はチト非倫なる場所柄に多く使ふ言葉ですが何樣睦まじく、互に同化せんまでに和した時の坐談なのです、可愛い子供を抱いて悠々として語る時は如何にもその心は樂しいに違いありません、喧嘩などする時、そう悠暢に構へて居られるものではありませぬ、僕が此處に說きます坐談法も平和

的のもので、坐談に於て喧嘩する法などは思ひ及ばぬことです、

俺の樂みや世界に二ッ、稻の花見に嬶の酌、

よく歌つて居るではありませんか、嬶の酌で飲んで、面白可笑く話に耽つて寢るまで樂しむとは、坐談の妙味は斯うして味はれるものです、春の風が燈火をフッと吹き消しても何の小言が出ましょう子供がないとて愁嘆する夫婦でも平和團欒の坐談には、凡て勞苦を忘れて、眞に樂しい浮世ぢや、と微笑も浮べましょう。坐談は幸福を產むの母とも云へるんぢやなからうか。所が。そう計りはならぬもので、樂しいのが浮世なりや、苦しいのも浮世、面白い坐談も辛い坐談と變ずることがあります。

人には好き不好きがありまして、好きなものは、假令惡くてもよく云ひ度いのが人情です、不好なものは假令よくても惡く云ひ度くなる。人情といふものは實に變なものでして、龍峽先生著時代と文藝の一章酒中の趣に、

人に上根あり、下根あり、上戸あり、下戸あり、全くの下戸は酒を以て百毒の魁となし、之を恐るゝ事蛇蝎虎狼よりも甚だしく、大の上戸は是を以て百藥の長となし、之を愛すること珍寶美人よりも深し

とあります、だから人の坐談するに當りまして時恰も不好の題目か他人の事が話題に上りますと、人はその感情に依つて或は非難する

とか、或は攻撃するとか、所謂口の序には如何なる事でも云つて了ふのです。

非難や攻撃は必ずしも人の悪口だとは云へないのです、その人に關しての事實もありましよう、或は公平なる批評もありましよう、墮落した男の事實を談つて、些か感情を混へますと、學生の身分でありながら、遊廓通ひを成すとは如何にもその本分を知らぬのではありませんか、去月は五回、今月は早や已に三四回行つた形跡があります。彼麼(アンナ)人間は迚ても前途は絶望です。之れ位なら非難でしよう、然し尙ほ一歩進みまして、

だからさ、奴等が居ては吾輩の名譽に關するから須く排斥すべしだ、

と云ふ域に達すれば攻撃です、第三者が目前に居ないと互に非難し合ひますと如何に感情が激昂しましても鬪爭などの憂ひはありませぬが、その非難攻撃の中心たる當人が居ると愈々事でしよう。誰しも毆らるれば痛い、悪口さるれば耳が痒いのです。チヤン的人間ならいざ知らず、金に腰折る的の人物ならばいざ知らず、苟も自尊心ある者にありましては迚ても韓信の股潛りを再演して默しては居まいと思ふ。鬪爭にまで進化しなくとも口論位の事はやり兼ねますまい、沈靜なる坐談のみよりは時にはチト賑やかに之もよいか知らぬが然しそは又小人の成すべき事に外ならないのです、之れ即ち最初

から非難攻撃などするのが間違つて居るからです、人を見て法を說け、は此處の事だと御悟りになつては如何ですか諸君。

非難攻撃それ自身が已に不可ではありませんか、されば先輩學者などの處へ參りまして此種の言語を使つてはよくないのです。若い者の生意氣も無邪氣なのは大に愛すべしですが、色氣が出ると臭氣紛々です。

彼桂か、總理大臣は俺も氣に喰はんのぢや、怎うしても吾等の政黨內閣を作らにやいかんわい、

と政客の言でも聞くと、何だか自分まで政治家の積りで、碌々物も解らないで、

桂の財政方針は餘り細工過ぎるから怎うも不安で不可ん、また今日の外交方針には僕も呆れた。

生意氣にも程があります、眼ある人なら直ぐ此奴妙な奴と睨まれて了ふのです、饒舌らんとよかつたと後悔しても後の祭り、疲勞だけが儲けなんです。

世の中は文明の程度が進むに從つて人民は好奇心が旺になつて來るのです、犯罪など調べて見ますと獸姦罪てふ妙な事があります し、それに自殺も一種の好奇心に驅られて、凌雲閣の十二階から飛ぶ位はまだしも、最高の學府たる帝國大學の學生が、嘘學問不可解の遺書を殘して命を捨つるなど、青年諸君怎う思ふとるです

か。今日の世の中は一應打ち壊して改造するといゝです、悲痛なる語調をも帶びた聲で恁う話しかけられると、何樣現代を攻擊するんだ、と氣早くその意志を仰合して攻擊の口調を成す者がありるのです。

實際文明人の好奇心の度の高まるのは幾多の證據が每日多くなつて居ます、御覽なさい、新聞などでは、十万圓の手附を取つた名脚本とて吃驚して每日色々の記事を掲げて居る動物劇を、シャントクレールと云つて新劇だつてさ、人間の芝居は見飽いて人間が動物に扮した動物劇を見ん爲に、三圓五十五錢の席が四十三圓にもなつたさうぢやありませんか、一夜に三万幾千圓とかの收入だと、人間の好奇心程恐ろしいものはありますまい、早速叩き毀さねばならんです。

意氣揚々たる所はよい。物に當つて意見の立つのはよい。然し意氣が揚るからとて、意見が立つからとて、先輩の前では非難攻擊は殆んど絶對に止した方がよからうと思ふのです。非難攻擊を成す場合は、口の勢に乘じて縱横に饒舌るのだから頗る痛快なんです。然し後になつて考へて見ると心持ちのよいものでは有ません。自分も彼麼風にやられたら怎うだ、と思ひ當ると一寸胸がドキ附くのです。然し人としては、非難も攻擊も出來る位の元氣だけはなくちやならぬのです。

滑稽と奇言

單に可笑しい、と云ふのは滑稽や奇言のみの特産物ではありませぬ。

佛だつて基督だつて何の役に立つものか、坊主や牧師が飯の種に、南無阿彌陀佛とか神よアーメンとか云ふのさ。

と云ふて神佛を排斥し嫌ふ人が、絶命せんまでには行かなくとも、五ヶ月とか一年とか床に附いて、床中の苦悶に堪ねず、遂に南無阿彌陀佛とか、イエスキリストの御名に依つてとか、突然言ひ出した日には、聞く人には、可笑しい、てふ觀念が起るのです。又肩の上に手拭を掛けて居ながら、それとは知らずして、

嬶手拭は何處にあるのか、

と探し廻るのを見ても、矢張り可笑しいのではありませんか、巡査が、人民に向つては、

こら、貴樣は、

と云ふ口で警部などの前に出ると、

へい、私は、

と頭を下げるなどは隨分余所目には可笑しいものです、

然し可笑しいのが滑稽と云へば、此等凡てが滑稽でありましよう、奇言奇行も矢張り滑稽の部に這入ることになるのでしよう。

落語家などは人を笑はせようとの目的で、滑稽な事を申します、斯く申すと滑稽には、必ず限つた言葉とか物語りとかあるやうですが、決してさうではありませぬ、落語家などの話しには、「落ち」と云ふことがありまして、不意打ちをやつて聽者をワッと笑はせるのです、だから之は上品ではありませぬ、怎うかすると駄洒落とか惡落ちとかになり升、僕が坐談に用ゐんとする滑稽は上品なものです、然し自讃自讃には碌なものはないさうですから實は茲に云ふ上品な滑稽も或は怪しいものかも知れません。

如何なる事にも滑稽趣味がないと兎角無味乾燥になり易いのです義務の伴ふ事でも面白味樂し味と云ふ滑稽が伴へば一層の勇氣と精力が迸出して努力が出來ます。之なき時は直ちに飽氣が出るやうです。然も之にも態とらしい滑稽があると大に品位を下げます、何と滑稽ではありませんか、笑ひ給へ、と云つた所で何んの興味もないですから眞面目に話して、その間に滑稽趣味を持たせるのが宜しいのです。

松田政久さんが洋行した時、瀛車中で或物を催したさうです、所が何處で用を達すべきか分らなかつたから靴を拔いで、その中に小便をして又それを穿いたと思ひ給へ、實に可笑しい事ではないか。

では怎うも可笑しくなりかけて居る處へ催促的の語が加はるので可

笑しさを中止せねばならぬ樣になるのです、吾輩は猫である、の一節に恁麽意味の事があります。

世の中の事は何でも當にならないものですよ、

と叔母なる人が娘なる女學生に申しますと、

ねゝ、全くよ、何だつて當にならないわ、妾は屹度及第すると思つてたのに、矢張り世の中は當にならないわ、

一寸聞きにも可笑しいのぢやありませんか、彼猫本を讀むと、笑ひ過ぎて後には笑ひ辛い樣な氣が致します、天下を驚かした本てなものは違います、それに喜劇作家の大家と云はれて居る掬汀先生の近作、仕合者、を讀んで居る內は破顏の連續です、今本がないので面白い滑稽な例が引證されませぬが、或る一節に、女は不用心だからとて伯母さんに股引を强制されたる娘がその律義ある伯母の側での坐談が面白い。

「伯母さん蚤が居て刺すのよ」

「ねゝ？」

「股が痒いわ」

「それ股と云ひなさるな、大腿と云ひなさい」

「だつて股が痒いわ」

「そんな下品な言葉を使つてはいけません」

「おう……大腿が痒いわ、股引なんか脫いで了ふわ」

「いけませんよ、股引は女の嗜み、轉びでもしたら大變」
「お尻が痛くなつたのよ」
「お尻では、上品ではありません、骨盤と御言ひなさい」
「大腿と骨盤が痛くて痒いのねゑ」
之は僕が仕合者を讀みまして頭に殘つて居る所を書いたのですが、原文では尙ほ〳〵滑稽なんです。一日仕合者の著者を訪ひました時に、
時事新報の仕合者の評を見ましたか、
と聞いて見たんです。見ないと言はれますから同紙上の評が、眞面目過ぎた本だ、とあつた事を物語りますと、

落語家の語る樣な滑稽や駄洒落の滑稽ものなら喜劇も何の價値だつてあるまいと思ふ、此頃西洋の作物を讀みましたが一寸は面白くないのです、所が段々考へて居るとそれは滑稽です、將來の喜劇には眞面目なる滑稽が第一必要だと思ひます。
だから僕も思ふのです、そら笑へ、何故笑はんのか、之でも笑はないのか、と樣に云つて滑稽趣味を引張り出さうとするのは決して褒めた話ではあるまいと思ひます、自分で話して、面白いですなア、と自分が卒先して笑ふやうでは餘りよく有升まい、左程に面白くないものに、ハッハッーと疳高く笑つて、鼻の廻りに妙に皺を寄せて相手の顔を見る人が有升が、之は所謂御世辭笑ひと申しまして、賣女

や幇間の成す業で二十世紀の紳士や淑女の學ぶ業ではないのです。けれども此笑ひを引張り出すにも方法がありまして、中には一寸珍なのもあります。

子供の生命は玩弄物です、朝眼を醒すときも、夜る床に就く時も枕から離さぬものは玩弄物です、子供が玩弄物を愛するのは無理もありませぬ、それに親たるものが子の心を察せずして、子供の玩弄物を無理に取揚げやうとするのは、親夫婦が睦まじき寢物語りの最中に泣出して駄々を捏ねて邪魔をするのと同じでしょう。チト娓いやうですが、凝と考へて居ると破顔し度くなるではありませんか。

駄洒落を云つたり、悪落ちを作つて滑稽にせんとするのは恰度三段論法に則らぬ論法を以て議論せんとするに等しいのです唯何氣なく云つた事が面白可笑くなるのを上品なる滑稽と申します。矢張り、門と云ふ小説にですが、

「勉強？もう御休みなさらなくつて」と誘はれた時、彼は（宗助）振り返つて、

「うん、寢よう」、と答へながら立ち上つた、寢る時、着物を脱いで、寢卷の上に、絞りの兵兒帶をぐる〳〵卷きつけながら、

「今夜は久し振に論語を讀んだ」と云つた。

「論語に何かあつて」とお米が聞き返したら、宗助は、

「いや何にもない」と答へた。

何の可笑しい所があるものか、と性急（セッカチ）の人は云ふかも知れんが、よく考へて見ると噴飯し度い程でしよう。

論語に何かあつて、

は何と奇抜ではありませんか、今日の新聞に何かあつて、なら普通ですが、何時も漱石先生の小説は此麼處で讀者を笑はせるのです。

そこへ以て來て、

いや何にもない、

の答へが振つて居る、小説世渡りに左の如き會話があります、

「あら貴郎の衣服は綻びて綿が出てるわ、隨分だわ、而してそれを着て？」

「はあ、縫つて呉れる人はないもの」

「それ、着換へるといゝわ」

「だけど貴女、之は銘仙ですよ」

「なんぼ銘仙だつて五月の月に綿入とは」

女だつてさうです。一寸見には別嬪でも、見て居る中に、金箔が剝げる樣に少しもよくない女も居れば、一寸には左程氣を引かれなくても、向會つて話す中に段々美質を表はす女が居ます、高い笑ひ聲の話を聞きましては笑つては見るけれども暫くすると、馬鹿にしてらアとの氣が起るのもあれば、聞く時は左程でもなくて段々する

中に一人で笑ひ度くなる事が度々あります、で、眞に滑稽と云ふのは後者なんです、笑ふにも眞面目でなくちや、空笑ひ、御世辭笑ひ根なし笑ひ、阿呆笑ひ、馬鹿笑ひとなり終るのです。

奇言は其人の品性を卑くするものですから坐談には絶對に避くべきですが、然し奇言は奇拔で且つ痛快であるから聽者をして大に愉快を感ぜしむる事もあります。

併し本人が眞面目と思ふことで聽者に奇言と思はしむることがある、これは特別の智識ある人の奇言であります。

此四月十五日にはハレヶ彗星が地球に接近しまして、酸素が多くなつて地球の人間は凡て死んで了ふと或る天文學者が申しましたが、事實だと吾々には不吉な事でも、偉い豫言者になります、所で四月十五日が過ぎても無事であると、その天文學者を人は指して奇言を發する人だ、と云ふのです、宮崎虎之助氏だつて自ら豫言者と稱して、佛敎の前途は怎うなるとか、耶蘇敎の將來は如何に變轉するとか云いますが、事實さう行かなければ矢張り奇言を發する人となるのです。一体に奇言を發するその瞬間は如何にも痛快ですけれども眞面目に世を渡らんとするには決して成すべきではありませぬ。

坐談法　終

明治四十三年六月十一日印刷
明治四十三年六月十五日發行

坐談法
定價金四拾五錢

著者　立石駒吉
發行者　小林慶
東京市神田區錦町三丁目二番地
發行者　小林新造
全市神田區表神保町一番地
印刷所　久保田印刷所
全市神田區鍛冶町五番地
發賣所　嵩山房
東京市神田區錦町三丁目二番地
（電話本局三七九七番）

不許複製

29
332

29
332

204670－000－7

29－332

坐談法

立石　駒吉／著

M43
EDT－0044